

ケネス・J・デール著  
『神はいずこに 聖なる神秘の黙想』を読む  
(第2章および第3章)

Reading Kenneth J. Dale's *Where in the World is God?* (Chapters 2 and 3)

谷 口 真理子

Mariko TANIGUCHI

「どこにとどまっておられるのですか」(ヨハネ 1:38)

どこで神に出会うことができるのか。神はどこにおられるのか。魂が本当に満たされることを求め究極の根源を探す人々に向けて、福音ルーテル教会の94才の宣教師ケネス・デール師が新しい角度で語るのが、『神はいずこに 聖なる神秘の黙想』である(谷口訳, デール・パストラル・センター監訳, キリスト新聞社, 2023年)。前号では、序および第1章の解説を試みた。今号では第2章と第3章の要点を解説し、聖書及び霊性神学からの関連資料を付加する。神とはどのようなお方なのか、読者のさらなる理解と黙想に役立てていただければと思う。

デール師は2024年3月で98才であるが、ピルグリム・プレイス(引退牧師・宣教師共同体)の人々から思想・信仰の刺激を受けながら、いつも神について考え、新しい見方を探り、神を伝える表現を求めておられる。周囲からは「リベラル」と言われているそうである。師は米国ネブラスカ生まれ、シカゴ・ルーテル神学校においてMDiv, ユニオン神学校に

おいてPhD, 山口県で開拓伝道の後、東京三鷹のルーテル学院大学・神学校で35年奉職し、1982年に「人間成長とカウンセリング研究所(PGC: Personal Growth and Counseling Center)」を創設。1996年に引退後、カリフォルニア州クレアモントにあるピルグリム・プレイスに在住。なお、PGCは2012年に30年の歴史を閉じ、その後DPC(デール・パストラル・センター)が設立されている。(詳細は『PGC30年の歩み』, DPCニュースレター第8号をお読みください。)

本書の第2章において、著者は、現代の日常の語や概念を使って新しい神概念の可能性を探り、さらに、どこでどのように神に出会うのか、自身の体験を私たちに分かち合ってくる。

### 第2章 神を指し示す隠喩(メタファー)

メタファー(隠喩・暗喩)は修辭的な表現(a figure of speech)であり、1つのもので別のものを暗示して、その2つが似ていることを表わす。神について語られることは、みなメタファーであるが、従来の「栄光の王」「全

能の主」など、人間的イメージで神を表現することは、神の本質を理解する妨げになる。

「聖なるお方の衣の裾に触れる」ようなメタファーはあるだろうか（p.41）と問いつつ探求の旅は始まる。「衣の裾に触れる」とは、福音書（マタイ9:18, マルコ5:27, ルカ8:44）の箇所、12年間出血が止まらない病の女性が、イエスに近づきイエスの服の裾にそっと触れ、その瞬間に女性は病気が癒された。真の神に触れた瞬間である。真の神に触れるようなメタファーを求めて、この章は始まるのである。

メタファーは単純で具体的な言葉によって、言い表せないものを指し示す。仏教から来た表現に「月を指す指」（指月のたとえ）があるが、月や指はメタファーである。月そのものを持ってきて示すことはできない。真理そのものを見せることはできないので、指さすしかないのである。一見直接的なことを指しているように見えて、実は隠れた深い意味がこめられていることを表わす。メタファーは理性では定義・理解できないものを表現する手段である。誰も見たことのないお方を表すので、「神」という言葉自体もメタファーである。聖書の中には神を示すメタファーが130あるという。

イエスはシンプルなたとえ（parable）で神の国を語った。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。」（マルコ4:30-32）

洗礼者ヨハネは自分の弟子たちに「見よ、神の小羊だ」とイエスを指し示し（ヨハネ1:29-30, 1:36-37）、人差し指のようにイエスへの歩みを進めるよう促した人である

（中川『存在の根を探して』p.87）。

著者は私たちの周りにあるものから、神を考察し黙想する。たとえば、空気・水・光・音・炎・太陽や、電波・引力・エネルギーを、「神」のメタファーとして指し示している。霊や美の体験も、「神体験」のメタファーとして紹介し、神に出会うとはどういう体験なのか、神はどのようなお方なのかを指し示す。

### 空気・水：見えないが、私たちが包んでいる神

私たちは物質世界に囲まれて生きていて、多くの人は自分の世界を見える世界に限定してしまう。神は見えないし、非物質で形を持たないので、人間の感覚にはリアリティがないように思われる。しかし、私たちの現実には、無形で見えないものが多いのである。たとえば、空気や水。見えないが、私たちの命を支えている。神は、私たちの命を取り巻いている見えない神秘である。

知らずとも、私たちは神の中を泳ぎ、神に包まれている。

「私たちは魚のよう 神様の愛の中で泳ぐ」（典礼聖歌170）

「わたしを包むあなたの英知は神秘に満ち、あまりに深くおよびもつかない」（詩編139）

「愛します、あなたを。胸の中に吸い込まれる空気のように、あなたは私の中に入って来たから。誰も入ってこられなかったところに、あなたはやって来られたのです。」（キアラ・ルービック）

この私たちが包み込んでいるが見えないものを認め受け入れるかどうかは、私たちに任されている。受容を受け入れる勇気が「信仰」である。

## 電波・引力：見えないが全世界で絶えず働いている神

電磁波 (electromagnetism : DPC訳本書では「電波主義」p.45) や引力 (gravity) は、神の本質についてヒントを与えてくれる。例えば携帯電話 (注 : smart phone = 文字通りには「賢い音」) は、電波によって瞬時に世界中のデータを手に入れ、世界が私たちの手のひらの中にある。これは神の「遍き内在 (universal immanence)」を思い起こさせる。また、私たちの理解を超えた広大な「クラウド」上で (注 : クラウド = 雲は、旧約聖書では見えない神の象徴である)、たえず大量のデータが蓄積・処理されていて、私たちはその働きに信頼しきっているが、それは神の見えない「超越性 (transcendence)」を思い起こさせる。

## 引力：引き寄せる力である神

引力は、惑星を引き寄せ (lure)、軌道に保ち位置を定め、宇宙を形作り、秩序を作り出す。重力が無かったら、私たちは足を地につけることが出来ず、飛び回る物体と化してしまうだろう。重力・引力がなかったら、宇宙は崩壊してしまう。今この瞬間に、私たちを地球に着地させてくれているエネルギー。「全能の父である神の右の座に着」いておられる (seated at the right hand of the Father) お方。内在であり超越している不思議な神の力 (God's mysterious transcendent and immanent power) を、「引力」は示してくれる。

「主は必ず、わたしを引き寄せてくださいます。」(詩編27 : 10)

「私をお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、誰もわたしのもとへ来ることはできない。(No one can come to me unless the Father who sent me draws them.)」(ヨハネ6 : 44)  
「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。(And when

I am lifted up from the earth, I will draw everyone to myself.)」(ヨハネ12 : 32)

## 光である神

光も不思議な現象である。物理的に光は光波 (light waves) であり、光の波が照らし出す作用によって、「光だ」と分かる。暗闇の中で、一筋の光によって、見えないものが見えるようになる。光の神秘は、神の神秘である。聖書で神そしてイエスは光にたとえられている。

「主は私の光」(詩編27 : 1)、「神よ、御顔の光を輝かせ、私たちをお救いください。」(詩編80 : 4)、「神は光である」(I ヨハネの手紙1 : 5) など。

「私は世の光である。」(ヨハネ8 : 12, 9 : 5)、「私は光として世に来た」(ヨハネ12 : 46)

「光は暗闇の中で輝いている。」(ヨハネ1 : 15)

「この幸いな夜に、ひそかに私は出て行った。その光は私を導いた。真昼の光よりも確かに、私のよく知っているあの方が私を待つあの処 (ところ)。」(十字架のヨハネ、『暗夜』)  
「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。」(創世記1 : 2 - 5)

「霊の波 (waves of spirit)」が神から流出 (emanation) し、天地が創造される。光はエネルギーである。見えないが、今もこの創造のエネルギーは注がれ、人間に作用し続けている。

「流出 (emanation)」の語は、新プラトン主義・プロティノスの「流出説 (エマナチオ)」を想起させる。高い存在である「一者」は、低い存在を次々と溢れ出るように産み続けて

いくという世界観で、中世のキリスト教神学にも影響を与えたという。

### エネルギーである神

すべての物質は非物質の「エネルギー」であると物理学は見出し、全てのものに質量を与える素粒子（「神の粒子（God particle）」と一般に呼ばれる）の研究も進んでいる。こうした物理学の知見は、「物質のエネルギー」と「霊」の両者はよく似て交じり合っている（entwined）ことを示してくれる。存在するものすべての中に、神はダイナミックに臨在（presence）しておられる。すべてのモノや出来事のエネルギーは神であり、神は全宇宙のいのちかもしれない。昼と夜を分かち神のエネルギーを、私たちはいただいているのである。

東方教会の伝統では、神はエネルギーの中心に現存しておられる。神はとてつもないエネルギーである。神は、発展する宇宙のエネルギーの源、至高のエネルギーであるかもしれない（ジョンストン『愛と英知の道』pp.362-363, 374）。

### 音・言葉の中におられる神

音も見えない波である。ことばは意味を伴う音である。聖書は、目に見えないお方から人間へのコミュニケーション、「神のことば」である。このコミュニケーションは、印刷された文字によるものではなく、音声による oral communication である。

「声は聞こえなくても その響きは全地に その言葉は世界の果てに向かう。」（詩編19）イエスご自身が「神のことば」と呼ばれている。「言（ことば）は肉となって、私たちの間に宿られた。」（ヨハネ1：14）

「ことば」は神の本質において重要な役割を持っている。（ゆえに、特別な言葉 the Word として教会では「みことば」。ギリシャ語ではロゴス）「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（ヨハネ1：1-2）「私があなた方に話した言葉は霊であり、いのちである。」（ヨハネ6：63）美しい響き・意味を伴う音（ことば）は、神の語りかけをこだましている。

聞く耳のある者に、神の言葉は響く。イエスは「聞く耳のある者は聞くがよい」を繰り返している。マタイ11：15、マルコ4：23、ルカ8：8など。「イスラエルよ、聞け（シエマ、イスラエル）」は旧約聖書で頻出している。オーケストラの指揮者は、フルオーケストラの中でもか細いフルートの音を聞き分けるために、多くの時間をかけてフルートの音に聴き入るという（中川 p.22）。私たちは日々喧騒の中にあるが、時には立ち止まり時間をとって耳を澄まし、奥底から静かに密かに響いてくるものに耳を傾け、神と共に休み憩う（安息する）ように、イエスは促している。

### 自分の内なる霊（spirit）から聖霊へ

私たちの中には「霊（spirit）」があり、霊を体験する瞬間がある。「霊」は見えないが、人間の本质の核であり、創造力・愛する力の源である。「霊」は非物質で、実体がない。宇宙にも見えない創造と愛の霊が存在しているのではないか。それは大文字のSで書かれる（the Spirit）「聖霊」である。パウル・ティリッヒ（Paul Tillich 1886-1965 ドイツの神学者で、後にアメリカで活躍）によれば、人間の霊と聖霊は、共に関わり合う integral な関係である。ティリッヒによると、宗教は「究極との関わり」であり、存在の根底へ関わっていくことである。自分の魂の奥底の霊

を探ることは、神の霊（聖霊）を探ることとなる。「パウロ・ティリッヒは、自分の中の霊なるものを理解せずには、大なる霊を理解できない、と言った」（デール『90才の信仰エッセイ90』55, p.63）。

キルケゴール『死に至る病』の冒頭の有名な箇所「人間とは精神である。精神とは何であるか。精神とは自己である。自己とは何であるか。自己とは自己自身に関わる1つの関係である」において、「精神」と訳される語はSpiritであり、聖霊と関連したニュアンスがあるという。Spiritは人間性のまさにエッセンスである。霊（spirit）とは、人の内面の深みで「神に開かれた最も深い相を意味し、心理的働きをする「心（soul）」とは異なり、人間の奥底で神と交わり、永遠者の意識に目覚める働きをするのがspiritであるという。（中川 pp.32, 218）人間の霊は、聖霊に繋がっているのである。

ギリシャ語の「霊 プネウマ」は「息」「風」ともつながる語である。神がいのちの息を吹き入れられて、人は生きる者となった（創世記2:7）。自分の魂の奥底に霊を探ることは、神の息（聖霊）を探ることとなる。

「地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」（創世記1:2）  
「霊よ、四方から吹いてこい。これら殺された者の中に吹きつけよ。すると彼らは生き返る。」（エゼキエル37:9）

「神の息よ 我を清め み形の如く ならせたまえ。

神の息よ 我に満ちて みこころを常に なさせたまえ。」（讚美歌177）

「風がどこから吹いて来るのか、人は誰も知らない。愛を呼び覚まし心を潤し、いつのまにか私の中を吹き抜けてゆく。」（典礼聖歌386）

### 美しさの中に現われ出る神

神を表す表現は、これまで「真理」や「善」に偏っていたかもしれない。芸術や自然の圧倒的な美しさに遭遇する瞬間、栄光が天から輝き降り注ぐように感じる時がある。そんな時、美が「神の栄光」を現わしている。理性ではなく直観的な美の体験、それは荘厳な神性の体験、宗教体験に似ている。

「天は神の栄光を語り 大空は御手のわざを示す。」（詩編19:2）

自然の美しさの中を祈りつつ散歩していると、「いま、ここ」におられる神を体験することがある。この美しさを深く吸い込む。わたしを取り囲む世界に現れている美しい神の栄光に私は包まれる。美があるところに神はおられる。神に包まれその中に浸り一体となる感覚は、見えないものへの愛を強める。また、それは神は肉（the flesh「からだ」）となって私たちの間に宿られ（ヨハネ1:14）、見えるものとなられ、物質世界の中におられるという「受肉（the Incarnation）」の体験である。

受肉について詳細は5章の「体となられた神（the Embodied God）」で述べられるが、受肉（incarnation）とはキリスト教において、神が人間の姿でこの世に顕れたこと、すなわち神の子イエス・キリストが人間として生まれたことを意味する。incarnateの語源はラテン語でin- + carn-（flesh:肉、非精神、物質、現世）である。肉（flesh）とは、精神（soul）・霊（spirit）と区別された、見えるモノ（material）である。

「美の感覚」は原書ではaestheticsで「美学、美」の意味である。デール師はピアニストでもあり、また絵も描いておられる。前著『90才の信仰エッセイ90』（p.51）では、「純粋な

本物の美感を与えるものには、神が宿っている…このような美しさは、事物を通して与えられる、私たちへのキリストのやさしいほほえみである」というシモーン・ヴェイユの言葉を引用している。

### 世界は神が宿る「神のからだ (Body of God)」

美しい自然の中で一体感を感じる時、自然の荘厳さは神の言葉 (the language of the divine) を語っており、神そのものだという感覚に満たされる。

「私を包むあなたの英知は神秘に満ち」（詩編 139）

「神よ、造られたすべてのものによって、あなたを賛美します。」（アッシジのフランシスコ、太陽の賛歌）

アメリカの神学者サリー・マクファークは、世界は「神の体」であり、森羅万象 (the universe) は神の顕現であるという大胆なメタファーを使っている。作品によって私たちはその作者を知ることができるように、私たちは被造物である物質世界を通して、創造主である神を知ることが出来る。被造物全体は神性そのもの (the divine self: ジェンダーフリーな表現) の表われである。人間の霊は体と不可分で一体になって (inextricable) いるように、神の霊は体である万物 (the universe) から離れて宿られる (conceived) はずはない。

conceiveは「(子)を宿す、を受胎する」の意である。

He was conceived by the power of the Holy Spirit and born of the Virgin Mary.

「主は聖霊によって宿り、乙女マリアから生まれ」（使徒信条 The Apostles Creed）

この世界は「神の体」だと気づく (perceive :

conceiveと韻を踏んでいる) と、私たちの意識に常に神がおいでになる。神がお造りになって良しとされ、極めて良い (創世記1章) とされた世界、善意に満ちた宇宙 (benevolent universe 「慈しみ深い宇宙」: 詳細は第3章) に今、抱かれている。今、ここに、いのちの充満 (fulness of life) の悦びが溢れ、「ああ、神がここに」と口から言葉が出てくる。深い観想である。

「目を開きさえすれば、世界が神に満ち満ちていることを見るであろう。」（ヤーコブ・ベーム）

付記すると、「キリストの体 (body of Christ)」は、聖餐式・ミサの聖体拝領で私たちの手にのせられ私たちの体に入る、聖なるパンである。キリストの体であり、神の霊であり、神の大宇宙全体がここに秘められ、私たちはパンを手にしてこの存在の神秘を受け止めるのである。「体」は様々な象徴を含んでいる。十字架にかけられ、墓に葬られる「御体」でもある。神の御子イエス・キリストは、人間の姿をとって人間マリアから生まれ、人間の生活をし、十字架の死を遂げて葬られた。肉体を持った人間として生き、ご自分を「私の体」として弟子たちに与える。

Ave verum corpus natum de Maria Virgine. O Iesu fili Mariae.

「めでたし まことのお体よ マリアから生まれたもう。おお、マリアの子イエスよ。」

(Ave verum corpus)

ラテン語のcorpus (身体・総体) は、英語に入り「総体、集成: 体、死体」などの意味を持ち、また最近の言語学でも使われる語である。

### 生ける炎である神

シナイの荒れ野で羊の群れを追っている時

に、モーセは「燃える柴」を見つけた。「柴(しば)」とは、荒野によくある低い雑木で、薪にするくさむらである。ありふれた日常のただ中に、予想もしない所に神は現れる。柴の間に燃え上がっている炎の中に主のみ使いが現われた。燃えているのに柴は燃え尽きない。どうしてだろうと不思議に思ってモーセが近づくと、柴の間から神が声をかけた。聖なる出会いの瞬間 (the sacred moment of encounter) である。(出エジプト3:1-12)

神の現れは、柴の中の火、熱く力に満ちた炎であった。炎は手でとらえることはできないように、神は、とらえどころがなく (elusive)、永続性のある実体ではない (non-substantive) が、確かに「触れる」。一瞬、神がおられる悦び (the ecstasy of a fleeting Presence) をいただくが、この出会いの聖なる瞬間をとどめておくことはできない。あの不思議な現存のお方 (Presence) を抑えておく (stifle) ことはできないのである。いつの間にか過ぎ去って消えてしまう (fleeting) お方である。「その時、主が通り過ぎて行かれた。」(列王記上19:11) 神は動的である。

### 太陽のようにまぶしすぎて見えない神

著者は屋外で太極拳の動きをしながら黙想している。太陽を見ると直射日光はあまりに強烈なので目がくらんでしまうように、エネルギーと愛が神から絶えず流れ出ているが、その源はあまりに圧倒的で、人間は直接見ることはできない。旧約では、神を見ると死んでしまうと考えられていた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人は私を見て、なお生きていることはできない。」(出エジプト33:20)

### 親密な関係：パウロによるセクシュアリティのメタファー

「男性はその妻と1つに結ばれ、2人は1つになる。これは深い秘義 (神秘的な真理) である」(英語聖書からの私訳 エフェソ5:31-32)。パウロは、男女の肉体的な結びつきをメタファーとして、神の本質が私たち一人一人にまたキリスト共同体の中に埋め込まれている (embedded) ことを述べている。性的関係にたとえるほどに、この関係は非常に親密なものである。神の最も重要な特質 (the divine essence) が、人間の中に挿入されている (penetration)。親密な関係性と親密さの大きな働きについて、あらゆる性的欲望や性の潜在的可能性を用いて、「肉」をパウロは生々しく語っている (talking flesh)。パウロは、性行動 (sexuality) を、神の内在 (divine immanence) を味わう至高の (peak) 体験を表わすメタファーとして述べているのであろう。

「その時、この英知の淵は、愛の知識の鉦脈の中に靈魂を深く入れて、靈魂を大いに高め、高揚する」(十字架のヨハネ『暗夜』p.249)。神が靈魂に入れられ、人の存在のまさに中核で神が直接交わるのである。靈性神学において、魂とその花婿キリストとの間の愛の交わりは、究極的に靈的婚姻と呼ばれる段階に達する。靈的婚姻において性は浄化され、性のエネルギーは変容されて観想的なエネルギーになり、神化へと導かれるという。2人は一体となるように (創世記2:24)、神と靈魂の間の靈的婚姻においては、1つの靈、1つの愛となる。「主に結びつく者は主と1つの靈となる。」(Iコリント6:17) (ジョンストン pp.336, 347, 349)

### いのちの神秘，意識の神秘

小さいのちが誕生し成長していくのは、はかり知れない神秘である。いのちは、科学でも説明できない現象である。いのちの神秘によって生物は存在している。神は、いのちという神秘そのものである。神は、人間のいのち・あらゆるいのちの中で、具体的な「体」となれうるし、まことに体となられている（enfleshed）。受肉されておられる（incarnated）。「キリストは人間の姿であられ」た（フィリピ2：8）。「神はご自分にかたどって人を創造された。」（創世記1：27）。

さらに、人間は理解し考察する生き物である。人間の「意識（consciousness）」「良心（conscience）」は実に不思議である。「わたし」という意識（self-consciousness）は人間存在の深い神秘である。これは人間の神秘なのか、それとも聖なる神秘の働きなのか。

### 「天の父」もメタファー

「天の父」は私たちの神概念に大きな影響を与えてきた。

「我々は皆、唯一の父を持っているではないか。」（マラキ書2：10）

「私はイスラエルの父となり…」（エレミヤ31：9）

「天におられる私たちの父よ」（主の祈り マタイ6：9など）

しかし、「父」「天の父」という表現も、メタファーである。「天」は上にある物理的空間ではないし、「父」は人類の父・イエスの父というだけではない。「父」は、愛・力・知恵の象徴であり、根源・始祖を表す概念である。「天の父」には深い意味がある。

創世記5章にはアダムからノアにいたる系図、マタイ1章にはアブラハムからイエスに至る

系図があり、父・祖父…と始祖をたどることが出来る。旧約聖書の「父」は、「肉親の父親」や「先祖」、「助言者・預言者」の意味で使われ、また主君に対して敬愛を示す呼び方として使われているという。神はイスラエル民族の「父」であり（ヨハネ8：41）、神を「わたしの父」と呼んだイエスは大きなパラダイムシフトであった。

なお、神には「父」だけでなく「母」の側面もあり、旧約聖書（イザヤ49：15、66：9、66：12-13、cf.マタイ23：37）では、神は「その愛ゆえに、がむしゃらで愚かにさえ見える母」にたとえられている（C.メラー編『宗教改革期の牧会者たちⅡ』p.208）。遠藤周作は「母なる神」と呼んでいる。「悲しみや苦しみを分かち合い、共に涙を流してくれる母のような同伴者」は遠藤の神観を示している（井上洋治『イエスのまなざし』p.212）。

### 第3章 聖なる神秘としての神

第1章では「神は…ではない」と否定的アプローチで神について語ったが、この章では、肯定の道から神を語る。著者自身が探ってきたことや神が触れてくださった体験を分かち合い、思い巡らす。

この本の副題「聖なる神秘の黙想（*Reflections on the Sacred Mystery*）」とも重なる章である。Reflectionsは「思い巡らすこと」であるが、ここでは「黙想」と訳出した。Reflectionとcontemplationを区別せずに使う人もいるが、霊性神学ではreflection（黙想）とcontemplation（観想）には違いがある。まず一般的な「瞑想」はmeditationで、マインドフルネスなどで、心を静め「今ここ」に集中することである。「黙想 reflection」は人間の感覚と、知性・意志・記憶などの精神能力によってなされるが、一方、「観想contemplation」は、神



から注がれる恵みであり、「注賦的観想」である。黙想は能動、観想は受動とすることができる。(ジョンストン p.120, 152, 278)

### 神とは？

神は定義できない不可知の存在である。しかし、無条件の愛の息吹をお出しになっている (breathe out the breath of unconditional love) 聖なる存在を、私たちは感じ、そして直接に知る (intuit「直観する」: 推理を用いずに、直接に対象をとらえる) のである。神はお造りになったものをすべて愛しておられ、特に人間を愛しておられる。

神は人間に愛の息を吹き入れられた。神は息、霊 (ギリシア語「プネウマ」) である。「息」は古代世界において、生きている本人自身の象徴であったという。人が本当に生きるとは、神ご自身がその人の中に入って内面を満たすことである (中川 p.32)。

「主なる神は、土の塵で人を形作り、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(創世記2:7)

「キリストが私のうちに生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20)

「覚えておいていただきたいのです。神はあなたが大好きなのです。いかなる状況にあっても、あなたはどこまでも愛されているのです。」(教皇フランシスコ『キリストは生きている』111)

無条件の愛の息吹を、私たちは直感で知る。神の息づかいを聴き、感じることである。

「友よ、聞こう、あの息づかいを  
馬ぶねに眠る幼子の遠くかすかな息づかいを  
十字架の上にキリストの喘ぎ苦しむ息づかいを  
父と子の愛 聖霊のいのち溢れる息づかいを

を」(典礼聖歌403)

### 聖なる神秘

著者は、神は何であるのか明確にしたいと、日々あこがれ探し求めている (long for and seek some “definition” of God)。しかし学問的な定義の探求ではなく、純粹に「霊と真をもって神を礼拝 (worship Him in spirit and in truth)」(ヨハネ4:24) できるような理解 (understanding「知」) の探求である。「霊と真理をもって礼拝」は、サマリアの女性へのイエスの言葉の一節であるが、それは神が求めておられる真の礼拝を捧げる者の姿である。山や場所や知らないものを礼拝するのではなく、霊である神を、自分の霊において心底礼拝する姿である。「真理をもって神を礼拝する (worship Him in truth)」とは、真実に礼拝する、神を真実に愛するということであろう (伊従『いのちの泉へ』p.73)。

懸命に言葉を操って思索し苦悩してきたが、著者が辿り着いた「神」は、次のような表現である。

- ・「神」はあの尊い謎 (that Sacred Mystery), 愛の中に隠れておられ、宇宙と人を創造されるプロセスの中に私たちが知りうるお方
  - ・「神」は聖なる不思議 (holy Mystery), 愛と創造の泉
  - ・「神」は聖なる神秘 (the Sacred Mystery), 永遠の愛と創造の中に現れておられるお方
- 著者のこうした記述は連祷のような響きがあり、マリアの賛歌 (マグニフィカト ルカ1:46-55) のこだまがある。

神は泉である。

「私が与える水を飲む者は決して渇かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠のいのちに足る水が湧き出る。」(ヨハネ4:

14)

「渴いている人は誰でも、私の所に来て飲みなさい。…その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」（ヨハネ7：38）  
「玉座の中央におられる小羊が…命の水の泉へ導き…」（黙示録7：17）

「神は泉です。ですから愛する方のそば近くに、渴きをうるおしに行きましょう。神のみが私たちの心を十分に満たしてください。」（伊徒『あかつきより神を求めて』p.45, 三位一体のエリザベトの言葉）

この尊く不思議で神聖な他者（otherness）は「畏怖であり魅惑の神秘（*mysterium tremendum et fascinans*）」である。この表現は、宗教感情の底にあるものを分析したルドルフ・オットー（Rudolf Otto 1869-1937ドイツの哲学者・宗教哲学者）の『聖なるもの』（1917）からで、「畏るべき神秘（*mysterium tremendum*）」かつ「魅惑するもの（*fascinans*）」（オットー p.28, p.74）である。ラテン語*tremendum*は現代英語の*tremendous*「とてつもない、大きな」、*fascinans*は*fascinate*「魅了する」に繋がる語である。

‘god’という語は、人間が作った神々や天の超人を指す場合もあり、既存の神のイメージが付きまどっているので避けたいが、この神秘のお方を短く一言で表現する語がない。ゆえに、Godの語を使わざるを得ない時、聖なる神秘という神（大文字のGod：DPC訳では「真の神」）の意味で使っていることを意識する。

### 空間と時間を超えたお方

万物（the universe）と人間には、時間と空間があり有限である。一方、神は時間や空間に制限されず、「天」だけでなくあらゆるところにおられ、時を超えて永遠である。どこに

でも同時に存在することができ、始まりも終わりもない。人間の理解を超えた秩序の中の、隠れたお方。私たちは、この圧倒的の神秘に対して、畏敬のうちに謙遜して立ち尽くすしかない。

「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方」（黙示録1：8）

「わたしはアルファであり、オメガである。」  
「初めであり、終わりである。」（黙示録21：6, 22：13）

「栄光は、父と子と聖霊に、初めのように、今も、いつも、世々に。」（栄唱・頌栄）

「キリストは昨日と今日、初めと終わり、アルファとオメガ、時間も永遠も彼のもの。栄光と死は彼に 世々とこしえに」（復活徹夜祭）

神はすべての創始者であり完成者であり、永遠におられ変わらないお方である。永遠とは「空間・時間を超えた」という意味である。万物は神から出て、神によって成り、神に帰する（ローマ11：36）。

### 「存在そのもの」である神

神は存在そのもの（Being itself）であると言われる（パウル・ティリヒ：第2章参照）。a beingやa Being（1つの存在）ではなく、究極の存在（the Ultimate Presence）であり、「あらゆるところにおいてになる、最高最大の存在（the Ultimate universal Presence）」である。人間が想像しうるあらゆる万物（the whole universe）をはるかに超えた存在。万物を成す物質すべてのうちにおられる存在。私の体を成す物質すべての中に神はおられるのだから、私は神の中にいるのだ。神は私の息、私のいのちである。

神は存在を存在たらしめる存在の力、存在の

根底、存在それ自体である。

神は「わたしはある。わたしはあるという者だ。(I am who I am. I am.)」とご自分を宣言された(出エジプト3:14 第2章参照)。この「ある」の原語は使役的な意味もあり、「あるようにさせる者」の意味も含まれるという(中川 p.71)。存在(Being)は、キリスト教では臨在・現存(Presence)などの語でも表され、いま、ここに神がおられることを伝える。神の現存とは、生きる神が私たちと共に、今・ここにおられることである。

「神は人にその息を吹き入れ、人は生きるものとなった。」(創世記2:7)

私の息は神の息、神の息が私の息である。私のいのちは神のいのち、神のいのちが私の中にある。私の霊は神の霊、神の霊が私の中におられる。「キリストは私の内に生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20) 神の内在の体験であり、神と一体となる喜び、それは、神の喜びでもある。

「神は私のうちに、私は神のうちに。」(伊従『あかつきより神を求めて』p.45, 三位一体のエリザベトのことば)

### 万有内在神論 (panentheism)

万有内在神論とは、神は万物の中に存在し、万物は神の中に存在する(all-in God, all things-in-God)とみるプロセス神学論である。神は万物より大きく、万物を超え、万物を包み込んでいる。pan-は「全(all)」を示すギリシャ語源の接頭辞である。私たちの中に神がおられ、私たちは神の中にいる。(著者『90歳の信仰エッセイ90』の4および23を参照。)存在するあらゆるものは神の受け皿(receptacle)である。

「言は神であった。万物は言によって成った。

言の内に命があった。」(ヨハネ1:2-4)

「父よ、あなたが私の内におられ、わたしがあなたの内にいるように、…彼らも私たちの内にいるようにしてください。(ヨハネ17:21)

「あなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼等の内にいるようになる」(ヨハネ17:26)

「キリストが私の内に生きておられるのです。」(ガラテヤ2:20)

「わたしにとって、生きるとはキリストであり」(フィリピ1:21)

付記すると、汎神論(pantheism)では、万物(世界)=神とする。また、乙女マリアは、神のみ旨の器(vessel/receptacle)であった。(ルカ1:26-28)

神は世界に内在し(immanent)、世界は神の中に内在している。immanentは接頭辞in-とmanere(remain)から成る語で、文字通りの意味は「内にとどまる」。

「その名はインマヌエル(Immanuel)と呼ばれる。この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」(マタイ1:23, イザヤ7:14)

イエスの弟子たちは、イエスが泊まっておられるところへ行き、共にとどまろうとし、イエスはその内に入られた。(ルカ24:29, ヨハネ1:39)「靈魂の中で神は休息し憩われているが、被造物における神の住まい方はさまざまである。」(ジョンストン p.425, 十字架のヨハネのことば)。

神はあらゆるところにおいでになり、万物は神の中にあるというこの内在論は、たえずどこでも神に気づかせてくれる。私の意識に神を気付かせてくれる(it brings God into my conscious awareness.)。神がおいでになる、と

意識させられるのだ。ほーっとしてはいけ  
ない。今、ここにおられるのだから「気  
をつけて目を覚ましていなさい」とイエスも繰  
 り返している（マタイ25：13、マルコ13：  
 35、など）。ロヨラのイグナチオは、祈り以  
 外の時は、神の現存の中にあり、万物の中  
 に神を探すようにと指導したという（ジョン  
 ストン p.513）。

「この完全無欠の存在、存在のすべてであり、  
 唯一の真実なる存在、美と善と愛と英知、知  
 識、知性そのものであるこの存在は、私から  
 遠く隔たっているのではありません。被造物  
 は己のうちに神の完全さの反映を宿し、この  
 無限の太陽の陽の光を浴びています。けれど  
 も、…あなたは私の内にましまし、私を取り  
 囲んでくださいます…。私を全面的に充  
 たしてくださるのです…。私の体のどん  
 なに些細な部分と言えども、満たしてくださ  
 らないところはなく、私がその中に動いて  
 いるこの空気よりも、あなたはもっとじかに私  
 を取り巻き、私に触れてくださるのです。」  
 （シャルル・ド・フコー『霊のあふれの  
 手記』 p.91）

### 慈しみ深い全宇宙としての神

「慈しみ深い宇宙 (benevolent Universe)」は  
 プロGRESSIVE神学で強調される（『90歳の  
 信仰エッセイ90』39を参照）。創造の初めか  
 ら神は善意に満ちて宇宙を創造された（第2  
 章参照）。宇宙万物は神の愛に満ちている。

「私」という意識 (self-consciousness) は、自  
 分が愛し愛されるという体験に密接に関わっ  
 ているが、「神は私たちを愛している」とは  
 どういうことなのか。

「神は愛である。…私たちが神を愛したの  
 ではなく、神が私たちを愛し…」（ヨハネの手

紙 I 4：8, 9, 16）「神は世を愛された。」  
 （ヨハネ 3：16）

神は愛しました愛される力 (capacity「容量・  
 広がり」) をお持ちで、聖なる神秘のお方  
 にも自意識がある。神は嫉妬するほど民を愛  
 するお方（出エジプト34：14, 20：3-7）で、  
 その憐れみは「代々に限りなく及び…お忘れ  
 にならない」（ルカ 1：50, 54）。

では、「神が私たちを愛している」と、ど  
 のように分かるのか？著者はその体験を記し  
 ている。すなわち、心を開くこと。心を開い  
 てこのお方の現存 (Presence) に触れるので  
 ある。神はたえず共におられ、私たちの中  
 におられるのであるから、私たちに必要な  
 ことは、その存在に気づくように開いた心  
 であることである。私たちの側で開放状態  
 にしておくことである（『90才の信仰エ  
 ッセイ90』50, p.57）。

神への気づきは、最初はひそやかで微か  
 （かすか）だが、「静かにその存在に注意を  
 向けると、神秘的な現存を味わいたいと思  
 じられるようになる。そして慰めと愛され  
 ているという感覚に満たされる。」「太陽  
 から光線が湧き出るように私たちに上  
 に流れ落ちている。神は愛です。」「愛  
 そのものである神が靈魂へ流れ込む、こ  
 の体験は、神から直接に注ぎ込まれる  
 叡智である」（ジョンストン p.360, 510, 121）。  
 （また本書3章「霊に目覚めて」の項も  
 参照のこと。）

このお方に心を開いていると、慰めほ  
 とさせ元気づけてくださる。内なる平和・  
 創造・希望の力を与えてくださる。神が  
 この私に向けて人のように (personal) 現  
 してくださる、この神の一面 (ペルソナ)。  
 （それはキリスト教用語で言えば、「人格  
 的な出会い」という

ことである。)そして、心を開いていると、すべての自然に満ちる創造の力が、流れこむように感じる。世界を生かしてくださっている力、あらゆるものへ注がれる愛を感じる。慈しみ深い愛の宇宙に包まれている感覚である。美しく、秘められた力に満ちている。「慈しみ深い宇宙」は、「神は愛である」を表現している。

「人間家族を含めたこの宇宙の存在を生み出した強力なエネルギーは、〈慈しみに満ちた〉エネルギー」であり、「『神は愛である』とは私たちは〈慈しみに満ちた宇宙〉に生きているという洞察」である（『90才の信仰エッセイ90』19, p.22）。

### 神はいずこに？

広大な宇宙の中に、小さな「私」という意識がある。宇宙の中の塵に過ぎない私たち（『求道者の旅』p.30-31）は、宇宙を知るほど、創造主の神秘が深まる。本書のタイトル「神は世界のどこにおられるのか（Where in the world is God?）」が、「神は宇宙のどこにおられるのか（Where in the cosmos is God?）」として思い巡らされている。

神は内在かつ超越。宇宙の神であり、かつ私のうちにおられる神。しかし、「この言葉にならないお方を明らかにしようと努力するなら、実のところ、少しずつではあるが、言葉にならないお方ではなくなる」（マイスター・エックハルト）。直観（intuition）がこのお方を知る道である。

キリスト教の神秘家は、信仰の真理を、概念を超えて把握しようとする。明瞭な理性によらない不知の知は、曖昧模糊としてぼんやりとした知（把握）である。「わたしは知らぬ間に知らない所へ入り、知らないままにとどまった いっさいの知を超えて」（ジョンス

トン p.280-281）。

### 「より以上のお方（the More）」としての神

“the More”はウィリアム・ジェームズ（1842-1910、アメリカの哲学者・心理学者）による語で、マーカス・ボーグ（Marcus Borg 1942-2015、アメリカの神学者）が使っているという。

私たちの理性や能力を超えたより大きな何か、私たちの霊を揺り動かす何か、言葉にならないほど畏れ多いものという意味である。五感ではとらえられない何か、直感でしか分からない何かがあると認めることから、神を探す旅はスタートする。

著者の前著『90才の信仰エッセイ90』の1（p.2）の訳注には、「目に見える物を超えた存在、神の存在をより広くとらえた表現」とある。マーカス・ボーグは「神は他者であり、自分を超えた存在」と述べている（同著 12, p.15）。

「存在を超え 神性を超え 善を超えた三位一体の神よ。」（ディオニュシオス「三位一体の神に捧げる祈り」、ジョンストン p.69）

### 「他者」the Other) としての神

深い悲しみや絶望で、闇の中にいると自分が思い込んでいる時、「私たちの間におられる神（God within DPC訳では「共にある神」）」では不十分な時がある。そんなときはどうしたらよいのか、著者は自らの方法を紹介してくれる。神の内在（God's immanence）に包み込まれるように、自分の内なる弱さや不安の中へ、ひたすら神を吸い込むことである。また、「私の岩、私の逃れ場、力ある砦」（詩編62：3, 7, 18：2など）と歌われてきた超越の神（transcendent God）にしっかりとしがみつ়くことである。

「私たちの間におられる神（God within）」は、「神の国はあなた方の中にある（God's kingdom is within you.）（ルカ17：21）」を想起させるが、『新約聖書略解』（日本キリスト教団出版局）によると、この箇所は〈あなた方のただ中にいる、イエスご自身が神の国そのものである〉の意味である。イエスが私たちの間に共におられる。

DPC訳6行目から10行目は、原著では次のような内容である。「また、ジャン＝ポール・サルトルなど近代の哲学者たちも表明してきたように、〈神の形をした穴（God-shaped hole）〉が私たちの意識にはある。この意識の中の欠けた部分において、人は聖なるものを絶えず探し、〈他なる力（other power）〉に近づこうと希望をもって努めてきた。」

「神の形をした穴」は、神によってしか埋めることのできない穴である。ジャン＝ポール・サルトルはフランスの哲学者・小説家・劇作家（1905-1980）。

「万人の中には神の大きさの穴があって、ふさがれるのを待っています。それは恩寵と聖なる愛によってのみ、満たされる。」（リチャード・ロール『上方への落下』p.190）

神は私たちの間に共におられるだけではない。究極の神秘のお方は、私たちの内におられる（内在）かつ私たちを超えて（超越）おられる。弱い私の魂（psyche「プシユケ」）に隠れている、単なる慰めの存在ではない。いのちよりも大きな、あわれみの御力である。願い求めると、救いの手を差し伸べてくださる。ご自身が空っぽになるのではないかと思われるほど、良きもの（goodness）をすべて私の中に注ぎ込んでくださる。

## 聖なるお方としての神

現代世界は聖なるものへの感覚を失ってしまった。神聖さに向き合い、畏れ敬う静かな喜びを体験するには、どこに行けばよいのだろうか。聖とされるみ名（hallowed name）・聖なる神秘の前で、静謐のうちに、畏れ敬うという聖なる感覚は、真の宗教体験の中核をなすものである。主の祈りは、「天におられる私たちの父よ み名が聖とされますように（hallowed be thy name）」で始まる。「聖とされ（hallowed）」の語は、神聖さ・畏敬・神秘・超越・崇高を私たちに思い起こさせる。

日常から離れ、聖なる神秘の前で、その呼び声に耳を澄まし聴き入る時と場所を求める人は多いであろう。なお、主の祈り（マタイ6：6-13、ルカ11：2-4に基づく）は、イエスが弟子たちに教えた祈りで、プロテスタント訳では「天にましますわれらの父よ 願わくは御名（みな）をあがめさせたまえ。」、カトリック・聖公会口語訳では「天におられるわたしたちの父よ み名が聖とされますように」。hallowは古英語から存在する古い語で、原義は‘consecrate, holy’（聖別された、神に捧げられた、神聖な）である。

## 霊に目覚めよ

名前はその存在の窓口で、その存在の本質が現れると古代では考えられていたので、「み名」は神ご自身である。主の祈りの「み名が聖とされますように」また十戒の「わが名をみだりに唱えてはならない」（出エジプト記20：7、申命記5：11）は、私たちを取り巻いている霊的な世界・神秘に目覚めて気づくよう促す招きの言葉である。訪れる聖なるみ言葉に注意を向け、尊いものとして受けとめ、聴き従う（obey）ことへの招きである。「今日、神の声を聞くなら、心をかたくなに

してはならない。」(詩編95:8, ヘブライ人への手紙3:7-8) 自分の欲求を捨てて、神の御心に従う従順 (obedience) である。

十戒 (the Decalogue: deca-は10, 文字どおりには「10の言葉」の意味) の、「わが名をみだりに唱えてはならない」の「みだりに」は〈音を立ててやかましく〉〈むなしいことのために〉の意味で、「名をみだりに唱える」は、ぞんざいな態度で関わり、神をむなしく利用することである。名をみだりに呼ばないということは、相手を尊いものとして尊敬を持って関わることを意味する (中川 p.155-156)。

### 神は人格があるか (Is God Personal?)

人格神とは、人間のような意識や感情を持つ神である。人間とかかわりを持ち、個性がある神である。'personal' は 'person' の形容詞で、英語の person には「人間, 人格, ペルソナ, 人間であること, 身体」などの意味がある。このタイトルは「神には人間性があるか」ということであろう。(多神教や汎神論とは異なり) 唯一神の信仰 (theism) において、神は私たちを見守り慈しみ深く、私たちの祈りに答えて下さるお方という、人間的な要素を持っているように描かれるが、神は未知で不可知 (a Mystery) であるから「人 (person)」とか「超越した人 (super-person)」といった枠組みに押し込めることはできない。

人間に可能な最も深いふるまいは、人としての自分を捨て、創造の神秘のお方に一切をお任せすることである。自分の人間性をこの神秘に明け渡し、自己放棄し自分を無にして、神の創造の力に身を任せることである。

「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。」(マタイ16:24)

自分の持ち物を一切捨ててキリストに従う道

は簡単ではないが、崇高である (マルコ10:21)。

「キリストは人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで それも十字架の死にいたるまで従順でした。」(フィリピ2:8)

### イエスと「お父さん」

イエスはこの聖なるお方をご自分の「父 (Father)」と呼んだ。これは驚くべきことである。この語は、イエスが当時話していたアラム語で「アッバ (abba)」, すなわち「お父ちゃん」「パパ」である。日常的な親密さを持っている。今でも、信頼・安定・安心を自分の父親に抱いている人には、納得する表現かもしれない。

「父よ」は、イエスの神への呼びかけの言葉である (マタイ26:39, 42, ルカ22:42など)。マルコ14:36では「アッバ, 父よ」である。イエスの母語はアラム語のガリラヤ方言であった。アラム語 (アラマイ語) は紀元前1000年ごろから紀元600年ごろ, かつてのシリア・メソポタミア地方で話されていた古代セム語である。「アッバ」は父への親愛の情を表す親しみを込めたアラム語で、幼児だけでなくかなりの年齢になっても使われる語であるという。「アッバ」はイエスが初めて使った語であり、三位一体の父と一体となったキリスト・イエスの思いを表しているという (奥村一郎「霊性研究会講義録 23」p.52)。

主の祈りの前半は、天の父に向かって「あなた」と呼びかける、イエスご自身の生き方である。日本語では「天におられる私たちの父よ」と「天におられる」が先にあるが、聖書の箇所 (マタイ6:9-13, ルカ11:2-4) のギリシャ語での語順は「父・私たちの・あなたはおられます・に・天」であるという。

イエスが受けとめている神は、まず「アッパ」なのである。「天の超越」ではない。（中川 p.175-177）神との親しさを生きる姿勢を、イエスは具体的に示しておられる。*abba*を、井上洋治は「南無アッパ」と表現している。「南無」は「南無阿弥陀仏」の「南無」で、全面的に信頼する・帰依するという意味。「アッパとひとこと唱えるだけでキリスト者の祈りは十分深められます。」（フランシスコ教皇 2019.1.16 一般謁見講話）

### 神、父であり源であるお方 (God: Father and Source)

イエスは神を「父」と呼んだ。それは、私たち人間が、自分のいのちの出所で愛し育てくれた人として、親を体験しているから、「父」と呼ばれたのであろう。イエスにとって、神は愛の源であり、ご自分を大事にしてくださいの全き信頼のお方であった。

臨死体験は「帰郷 (going home)」体験であるという。根源へと戻って行く体験であろう。「父」は父祖・始祖、すなわち「始まり」であり、源である。私たちは、自分の根源を求め探していく旅路において、永遠なる根源のお方への畏敬と、このお方から溢れ出る父の愛・母の愛に満たされるであろう。「あなたの生命が湧き出てくることの深い底を探りなさい。その源泉にのみ、あなたは答えを見出すでしょう。」（リルケ『若い詩人への手紙』）

父祖をたどる旅・根源への帰郷は、マタイ 1: 1-17 や ルカ 3: 23-38 の系図に示され、連続と絶え間なく繋がる慈しみ深い神の愛が伝えられている。「三千年の時を突き抜けて、聖書を伝えた人間存在の響き」がそこにある（中川 p.35）。

「『わたしたちの父よ』という語句には、神の限らない愛と、それを信じて疑わない人間の応答が含まれていて、それを唱える人は、やがて、不可知の雲である神秘中の神秘の中へ入っていくかのよう」である（ジョンストン p.57-58）。

非人格 (impersonal) の「神秘」と、人格性をもつ「パパ」が一緒とはどういうことなのか、疑問も湧くであろう。しかし、神の本質は、1つのカテゴリー (区分) や枠組み (parameter) ではとらえられないし、不可知 (enigmatic) のお方を分解して解明することはできないのだ。

### 一人一人が神を見出さなければならない

人は一人一人、自分の「究極の意味」と、聖なる神秘のお方への自分の道を見出さねばならない。それぞれの意味、それぞれの道がある。これは教義研究から得られるものではない。それぞれが深く思い巡らし痛み苦しみ、突然、恩寵の賜物として見出すのである。信徒達は典礼や礼拝の中で共に見出そうとするが、「神秘の声」は、特有な調べ (distinctive tone) で私たち一人一人に語り掛ける。神の本質 (神性) は聖なる神秘であると知るなら、人はその声に耳を傾け、説教者は畏敬に満ちた詩を語るであろう。

苦悩の中で神の語りかけを聴いたキング牧師は、「神は自分自身で知らなければならない」と述べている（『真夜中に戸を叩く キング牧師説教集』から「なぜイエスはある人を愚か者と呼んだか」）。神を探し求める旅には苦痛が伴う。神秘家たちは深い浄化の道で体験する暗闇や苦悩について語っている。



### 容易ならざる問い (The Impossible Questions)

「もし神が全能なら、なぜ悪や苦しみを許しておくのか」という不可解 (enigmatic) な問いに直面し怒り苦しんでいる人に対して、「祈って神にゆだねさえすれば、神が必要なことをすべて配慮してくださる」とか「神は何が最善かご存じだ」と言うのは、人々を神から遠ざけてしまう。人間の「知」には限界があるのだ。「私には分からないし、私たちには分かりえない」が唯一確かな答えであろう。突然の悲劇や病いなどの体験は、私たちの世界においてはあらかじめ与えられたもの (given「前提、所与」) なのである。何であろうと、何が起きようとも、それは、「解決されるべき問題の前提」として与えられたものである。良いことであっても悪いことであっても、最大限に活かし善処することで、意味が生まれる。それは人間側が心を開いているかどうか、にかかっている。苦しみの折にも、慰めと希望を与え続けている聖なる神秘がそこにおられるのである。この存在に、自分の心を開き受け入れるかどうか (openness) は人間の側の課題である。人生のあらゆる体験に意味を見出すとき、その発見の中に聖なる神秘はおられる。

仏教でも、生老病死 (四苦) という人生で避けることのできない苦しみがあり、苦しみは人間が生きることの前提であるという。生老病死は、私たちの思い通りにならないことの代表である。

苦しみの黙想は、ゲッセマネでの苦しみ、鞭うたれ裏切られる苦しみ、茨の冠をかぶせられる苦しみ、十字架を担う苦しみ、肉体の死を迎える苦しみという、キリストの苦しみの神秘 (奥義・玄義) の黙想と祈りに招かれる。苦しむことは愛することである。

「イエス、喜びも楽しみも あなたがなければ意味はないのです。

苦しみも悲しみも あなたのうちでは すべて生き返るのです。」

「ご自分の死を通して、世にいのちをお与えになった主よ、

私たちの苦しみや悲しみが、あなたをたたえる喜びとなりますように。」

(奥村一郎『友の祈り』 p.28, 46)

*Nobody knows the trouble I've seen*

*Nobody knows my sorrow*

*Nobody knows the trouble I've seen*

*Glory hallelujah!*

「誰も知らない私の悩み

誰も知らない私の悲しみ

誰も知らない私の悩み

主に栄光あれ」

悩み・苦しみ・悲しみの真ただ中に主がおられることを見出す黒人霊歌である。

### 最も深い神秘

著者は、広大な砂漠を見つめて、宇宙の起源・人間の起源を黙想している。ビッグ・バンから生まれ広がって行く宇宙は、無作為の進化 (random evolutionary process) だろうか。宇宙の始まりも私の意識の根源も、虚無のいたずら (nihilistic trick) に過ぎないのだろうか。それとも、すべてに先立ち、すべてを超えて、またすべてのうちにおられる「聖なる神秘」が存在するのだろうか。まことに聖なる、畏るべき存在 (entity)。通常的手段では知ることのできない、不可知で (unknowable)、否定形でしか表すことのできない (apophatic「否定神学の」)、直感による対象 (concept) である。

詩編8篇の詩人も、満天の星と空を仰いで驚

きと不思議に満たされて、神を賛美している。「あなたの天を、あなたの指の業を わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは 人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは。」（詩編8：4-5）

「神がこれほどまでに愛される私たち人間という存在は一体何者なのだろうか」という疑問は、詩人にとって喜びと感謝、驚きと不思議である。

うかがい知れない神秘中の神秘であるお方の前では、人は畏怖で「驚き、口に手を当てる」のみである（ヨブ21：5、ジョンストン p.43）。

「神は…でない」と否定形で表す否定神学的な神の表現は、第1章で試みられているが、否定神学（アポファティック神学）は4世紀カッパドキアの教父から生まれた神学で、神は人間の理解を超えた存在であり、神は神秘中の神秘とする。5世紀末のディオニュシオスは、神秘ははっきりした輪郭を持つ形象や概念では表せないとする（ジョンストン p.43-44）。16世紀スペインの十字架のヨハネは、「知よりもむしろ不知の道を進まなくてはならない」、「注賦的観想の照らしによるのでなければ、どんなに崇高な博識で語ったとしても、自然的な方法や手段によっては、神に関することを知り、感じるのは不可能である」と述べている（同 p.279）。神は、「外側」におられるのではなく、人間の自己の内側に、広大な宇宙の被造物すべての中に住んでおられる。暗くおぼろげで神秘に満ちておられるので、デカルト的な明晰な観念で言い表すことはできない（同 p.241）。

第1章の否定神学と第3章の肯定神学（カタ

ファティック神学 cataphatic）両方からのアプローチにより、否定的なもの肯定的なものを1つの経験の中に融合させていくのは、教父の時代以来の神秘的な伝統でもある（同 p.46）。理性・知性ではなく、美的感覚や直感によるアプローチは第2章で述べられている。

## 参考文献

- 新共同訳 聖書 日本聖書協会  
讚美歌 日本基督教団出版局  
典礼聖歌 あかし書房  
井上洋治（1981）『イエスのまなざし』、日本基督教団出版局。  
伊従信子訳・編（1984）『三位一体のエリザベット いのちの泉へ』、ドン・ボスコ社。  
伊従信子（1986）『あかつきより神を求めて 三位一体のエリザベットの生涯』、ドン・ボスコ社。  
奥村一郎（1986）『友の祈り』、女子パウロ会。  
奥村一郎（2024）『霊性研究会講義録 23』、『カルメル 2024春号』、男子カルメル修道会。  
ルドルフ・オットー 華園聡磨訳（2005）『聖なるもの』、創元社。  
セーレン・キエルケゴール 齊藤信治訳（1939）『死に至る病』、岩波文庫 岩波書店。  
十字架の聖ヨハネ 山口女子カルメル会改訳（1987）『暗夜』、ドン・ボスコ社。  
ウィリアム・ジョンストン 九里彰監訳（2017）『愛と英知の道』、サン・パウロ。  
ケネス J. デール 小山栄一訳（2009）『求道者の旅』、リトン。  
ケネス J. デール デール・パストラル・センター 監訳（2016）『90才の信仰エッセイ90』、日本ルーテル神学校 デール・パストラル・センター。  
中川博道（2015）『存在の根を探して』、オリエンズ宗教研究所。  
日本基督教団出版局（1984）『新約聖書略解』、日本基督教団出版局。  
シャルル・ド・フコー 沢田和夫訳（2000）『霊のあふれの手記』、サン・パウロ。  
教皇フランシスコ（2019）『使徒的勧告 キリストは生きている』、カトリック中央協議会。

C.メラー編 加藤常昭訳 (2001) 『魂への配慮の歴史6 宗教改革期の牧会者たちⅡ』, 日本キリスト教団出版局.  
リルケ 高安国世訳 (1953) 『若き詩人への手紙』, 新潮文庫.  
リチャード・ロール 井辻朱美訳 (2020) 『上方への落下』, ナチュラルスピリット.

マーティン・ルーサー・キング, Jr. FEBC (2024.2.22放送) 『真夜中に戸を叩く キング牧師説教集』から「なぜイエスはある人を愚か者と呼んだか」.

DPCニューズレター 2022年6月1日第8号 日本ルーテル神学校付属研究所デール・パストラル・センター.